



日常では起こらないことが起こります。非日常性と、それから“時”の贅沢ですね。

船では、ショーやアクティビティのプログラムが朝から晩までぎっしりですから、選択肢が非常に多いわけですね。参加したいものに参加して、あとはぼーっと海を眺めていても、デッキで本を読んでもいいのです。自分の時間をすべて自分で選択して使うことができるというのは、現代ではなかなかできない贅沢だと思います。

佐多：日本ではまだまだこれからという感じのクルーズですが、外国ではどこの国の方々が一番利用されているのでしょうか。

増田：欧州ではドイツの方が非常にクルーズに興味をもっていらして、どこでも多く見かけられます。もちろん数の上で圧倒的に多いのはアメリカ人ですが、あとはイギリス人、カナダ人、それに中南米のお金持ちの方々などですね。

佐多：日本では、休暇の問題や、外国船に乗ったときは言葉の問題などがあるかもしれませんね。世界一周となると、料金はどのくらいですか。

増田：3万ドル弱から、高いものでは16万ドルというものもあります。ちょっと特殊な例として、今年のQEIIワールドクルーズではお一人約40万ドルという破格のデラックス・キャビンが売り出されました。でも、まず初めはカリブ海やアラスカなどの短期クルーズをお勧めしますね。カリブ海クルーズは楽しいですよ。若い方もかなりいらっっしゃいます。10万円以下で1週間のクルーズができる船がたくさんあります。よく探せば、日本からのエア込みで13万円台のカリブ海クルーズといったものも見つかりますね。アラスカクルーズは日本の方に特に人気があります。飛行機で西海岸まで行きさえすれば、アラスカの大自然を体験できるのですから。

最近日本でもクルーズ専門の旅行代理店があって、世界の船会社の総代理店もやっています。あとは先ほどご紹介したクルーズの専門誌を見れば、記事も広告も役立ちますね。「飛鳥」の方も、一応完売ということになっております

が、キャンセルなども出やすいですからまだ受け付けてくれると思います。興味がおありでしたら連絡をおとりになってみたら。30年あまり会社に尽くしていらっしやっただご自分に対するご褒美として、3カ月くらいいらっしやったらどうですか。

佐多：わー、うれしいことをおっしゃって下さる。発想の転換が大事だとは常々考えているのですが、3カ月も船に乗っていると一体どういう気持ちになるのでしょうか。私の場合、パソコンを持ち込んで、インターネットだ、Eメールだとずっと仕事をしているかもしれませんね。

増田さんは、今後はどのように船とかかわっていかれるお考えですか。

増田：2作目を書きたいですね。実際に船に乗るソーシャル・ディレクトレスの仕事は長くやってきましたから、これからは書くことによって、船旅の楽しさとか、いろいろな船のドラマというものを一般の方々にお知らせしたいですね。私自身がこんなに楽しんでいる船旅というものを、他のの方々にも楽しんでいただきたいという

使命感のようなものがあります。船を中心にした小説も書いてみたいんです。船はミステリーのシーンには非常に向いていますからね。書いていくことにチャレンジを感じています。

\*1「飛鳥」98日間世界一周クルーズ(3月～6月)  
360万円～1,750万円(早期申込割引320万円～1,550万円)

\*2森有正(1911～1976)  
哲学者、フランス文学者。祖父は、明治初期明六社を創立し、また伊藤博文内閣で文相を務めた森有禮。デカルト、パスカルの研究に従事。東大助教授を辞して、昭和25年戦後初のフランス政府給費留学生として渡仏。そのままパリに定住し、自我と西洋文明との精神的対決を多くの著書に残した。著書『バビロンの流れのほとりにて』『遠ざかるノートルダム』他。



# 麻酔薬と地球環境汚染

森田 茂穂・後藤 隆久



森田 茂穂 / もりた・しげほ

1948年群馬県生まれ。74年東京大学医学部卒業。マサチューセッツ総合病院麻酔科レジデント、フェロー、東京大学医学部附属病院救急部、麻酔科学教室などを経て、86年帝京大学医学部附属市原病院麻酔科教授。ハーバード大学、ワシントン大学、ペイラー大学客員教授、新潟大学、富山医科薬科大学、日本大学非常勤講師。専攻は麻酔科学。

## はじめに

去年京都で開かれた地球温暖化防止国際会議で、日本は、二酸化炭素等の地球温暖化ガスの人為的排出量を1990年のレベルより6%削減することを要求された。ヨーロッパ諸国が環境保全にこれまで払ってきた努力、これからさらに目指している目標に比べると、この数字は決して突出したものではないが、わが国にとっては、今のままではきわめてきびしいものと言えよう。

麻酔科医が大気中に毎日放出する余剰ガスも大気汚染ガスである。省エネ、環境保護というと自動車や工業、家庭生活ばかり注目されがちであるが、その陰で麻酔も、医療行為という美名に覆われてはいるが、環境破壊の原因になっている。では、余剰麻酔ガスはどんな影響を環境に与えるのだろうか。

## 1. 麻酔はガスでかけるのが主流

全身麻酔は、エーテル麻酔が今から150年ほど前、Bostonのマサチューセッツ総合病院で初めて公開された時から、麻酔ガスを患者さんに吸わせてかけるのが主流である。現在では、エーテルは引火性が強く、電気メスの火花で火事になってしまうのでもはや用いられず、亜酸化窒素(笑気; N<sub>2</sub>O)にハロゲン化炭化水素であるイソフルランやセボフルランなどの揮発性麻酔薬を加えている。麻酔は大量消費を美德とするアメリカで発達したために、現在でも、これらのガスを高流量で、いわば患者さんの口元で吹き流して吸ってもらうのが普通である。実際には、亜酸化窒素と酸素を一分間にそれぞれ4L、2Lずつ流すことが多い。しかし、このうち実際に患者さんの体に取り込まれるのは、亜酸化窒素が50-100ml/分、酸素が200ml/分程度にすぎない。残りのガス、例えば亜酸化窒素なら毎分3.9Lは、大気中へと捨てられている。同時に、これに混ぜられているセボフルランやイソフルランなどの麻酔薬も大気中に捨てられている。

## 2. 亜酸化窒素は地球温暖化ガスである

地球温暖化といえば二酸化炭素が有名だが、亜酸化窒素も地球温暖化に約6%寄与しており、地球温暖化に関する主な原因ガスの一つである。(図1)

亜酸化窒素は、大気中濃度は低いものの一分子あたり二酸化炭素の230倍の温室効果greenhouse effectを有している。さらに二酸化炭素と決定的に異なり、大気中での寿命が150年と他の温暖化ガスと比べても圧倒的に長い。従って、私たちが今排出している亜酸化窒素は22世紀半ばまで大気中にとどまり、地球を温め続けることになる。

## 3. 麻酔余剰ガスは亜酸化窒素の人為的排出源としてどの程度重要か

亜酸化窒素は、天然の大気にも存在する。その濃度は、産業革命以前の数千年にわたって一定であったことが、南極の古い氷に含まれる気泡中の空気を調べたりすることで、明らかにされている。しかし最近、石油燃焼等の人為的発生により、大気中の濃度が加速度的に上昇してきた。(図2)

日本の場合、人為的亜酸化窒素排出の総量は、1993年の推定で約54,200トンであり、一方、麻酔用に用いられた亜酸化窒素は、1994年の薬事工業生産動態統計によると約1,315トンと、人為的排出量全体の約2.5%を占めている。この2.5%という数字は、一見とるに足らなく見えるが、実際は決してそうではない。なぜなら、

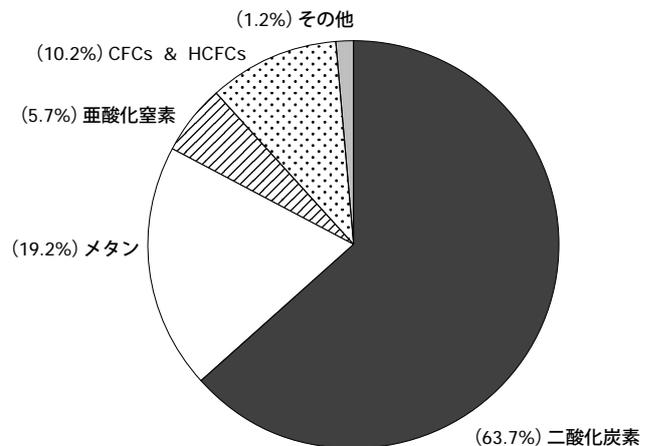


図1；産業革命以降人為的に排出された温室効果ガスによる地球温暖化への寄与度(1992年現在)



後藤 隆久 / ごとう・たかひさ

1962年兵庫県生まれ。87年東京大学医学部卒業。マサチューセッツ総合病院麻酔科レジデント、集中治療医学フェローを経て、95年帝京大学医学部附属市原病院麻酔科講師。専攻は麻酔科学。

温暖化ガス削減が容易でないからである。現状では、各国が数%のオーダーで削減目標を設定し、あるいはそれぞれの思惑を交錯させながら牽制を掛け合っている。というのも、温暖化ガスが産業や経済、人間活動と密接に結びついているからである。例えば、地球温暖化の主要原因ガスの二酸化炭素や亜酸化窒素はいずれも石油燃焼が主な発生源であり、この削減は産業や経済の沈滞に即つながりかねない。亜酸化窒素はまた、農業(窒素肥料使用)からも発生するが、この抑制は食糧の減産につながり、増加する一方の世界人口を考えると極めて困難である。地球温暖化は、人口問題にも直結している。このようななかで、麻酔用の亜酸化窒素は、後述するように低流量麻酔を行うだけで、患者さんに何の不利益も及ぼすことなく大幅に削減できる。たとえ2.5%といっても、真剣に考える価値のある問題であろう。

#### 4. 揮発性吸入麻酔薬は一種のフロンガスである

亜酸化窒素と組み合わせて用いられる、イソフルランやセボフルランなど揮発性吸入麻酔薬は、化学構造が、冷蔵庫の冷却ガスやスプレートのガスなどに用いられたフロンガスと共通している。フロ

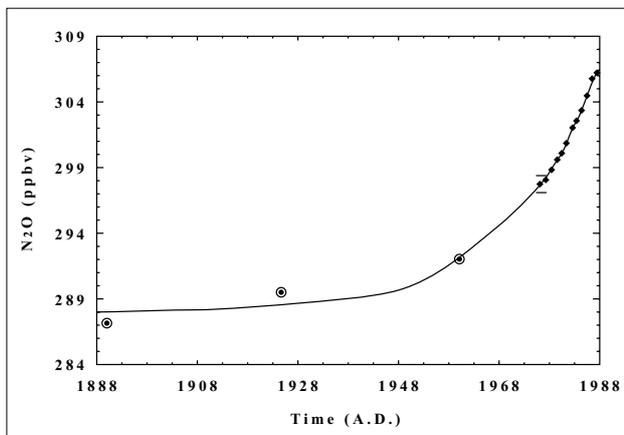


図2: 過去100年間の亜酸化窒素の大気中濃度の推移。Khalil MAK, Rasmussen RA: Nitrous oxide: trends and global mass balance over the last 3000 years. Ann Glaciol 1988; 10: 73-79より。

ンガスは大気圏の上層部にあるオゾン層を破壊して地表への紫外線の到達量を増やすうえ、強力な地球温暖化ガスでもあるので、国際規約によりその生産が中止、あるいは規制されている。揮発性吸入麻酔薬も、環境に同様の影響を及ぼす可能性があり、その使用は最小限に留めるべきであろう。しかし、幸いなことに、これらの麻酔ガスは大気中の寿命が2-6年であり、フロンガスの65-110年と比べはるかに短い。さらに、揮発性吸入麻酔薬の中では現在日本で最もよく用いられているセボフルランに限っては、その化学構造に塩素や臭素原子を含まないので、オゾン層に対する影響はごくわずかであろうとも言われている。

#### 5. 明日の世代のためにできることは?

ガス麻酔薬のこのような現状を踏まえて、明日の地球を汚さないようにするには、私たちは何をすべきだろうか。

まず、ガスを全く用いない麻酔をするという方法が考えられる。しかし、現在の静脈麻酔薬は、ガス麻酔薬に比べ麻酔深度の調節性という意味でまだまだ及ばない面がある。

では、ガスの使用量を減らして、低流量麻酔を行うのはどうだろうか。これは、現在のようにモニターが進んだ時代では、極めて容易と言える。医療にかかわる全員が環境への危機感を高めれば、短期間に達成可能ではないだろうか。(欧米では、主に経済的理由により、低流量麻酔が主流になりつつある。)三番目に、環境に影響しないガス麻酔薬を用いる方法がある。例えば、亜酸化窒素より強い麻酔作用をもつキセノンは、大気中に天然に存在するものを精製して用いるので、麻酔後大気中に放出されても、汚染にはならない。キセノン麻酔の研究は、まだ端緒にすぎないが、今後の発展が期待される。

#### 6. 終わりに

立つ鳥後を濁さずというが、20世紀の終わりが近づいている現在、次世紀に温暖化ガスという置きみやげを残したくないというのは、私たちに共通の願いであろう。医療に携わる私たちも、今日の前の患者さんを癒すために次世代を犠牲にするのではなく、来世紀も視野にいたれた行動が今求められているのではないだろうか。

# 感染と人間 (10)

中田 光

臨床にいと、数え切れない程の患者との出会いがあり、日々の喜びと悲しみがある。全く記憶に留まらない患者もいれば、何年経っても忘れようにも忘れられない人もいる。患者にとっても、どんな医者に出会うかは、生死を分けることもあるわけだから、出会いはもっと切実な人生の重大事なはずだ。

研究もまた出会いから始まると思う。数学や理論物理はともかくとして、医学は経験がかなりウエイトを占める学問だから、余計に出会いが重要である。北里柴三郎はコッホに出会い、傾倒して、破傷風菌を発見し、志賀潔はその北里の下で赤痢菌を発見した。「出会いとは、決して偶然ではないのだ。でなければどうして、出会いが、ひとりの人間の転機と成り得よう。」と作家宮本輝氏は書いているけれども、人生の半ばを過ぎて自分がやっている研究を見つめ、周囲にいる人たちを見つめ、自分の境遇を考える時、恐ろしいぐらいにこの言葉が真実味を帯びてくる。

## 赤川先生と肺胞マクロファージ

初めて肺胞マクロファージを観たときのことは、今でも忘れられない。T病院で気管支鏡検査を始めた昭和61年頃、医科研感染症内科の後藤元先生が診断手技にと教えてくださった肺胞洗浄法を使って、私は肺炎や結核、サルコイドーシスの診断を次々にやっていった。病巣がありそうな肺の細い気管支に気管支鏡の先端を進めて、注射器で生理食塩水をそっと注入する。そして再びゆっくりと注射器のピストンを引くと、注入した生理食塩水とともに、肺の一番奥に位置している肺胞の中の細胞が取れる。ある時、検

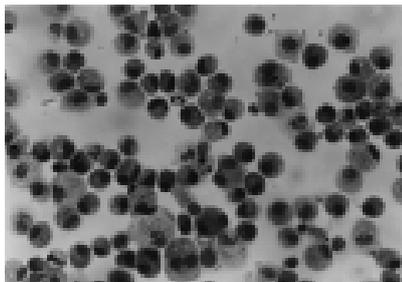


写真1: 健康者の肺胞マクロファージ

査室に行ってプレパラートの上に染められた細胞を顕微鏡下に覗いてみた。そこには大きな明るい細胞質の細胞—肺胞マクロファージが沢山観られた。血液中の白血球と違って肺胞から取れてくる細胞はほとんどが単一の美しいマクロファージの集団だ(写真1)。しかし、よく観ると大きさはまちまちで、染色液での染まり方も一様ではない。中にはゴミのような異物を取り込んでいる細胞もある。この細胞が肺胞にいて、表面を滑るように絶えずパトロールして、菌や小さな塵を見付けると、どんどん飲み込んで消化してくれる。だから、マクロファージのことを大食細胞と呼ぶ人もいる。そのおかげで我々は肺炎にならずにすむのだ。ヒトの肺には約7億個の肺胞があり(図1)、1個の肺胞には平均50個の肺胞マクロファージがいる。つまり、一人350億個の肺胞マクロファージを持っていることになる。肺の感染症を考える時、どうしても肺胞マクロファージを抜きには語れないだろう。肺胞マクロファージはまさに最前線にいる精鋭部隊なのだ。そう思って観ていると私は肺胞マ

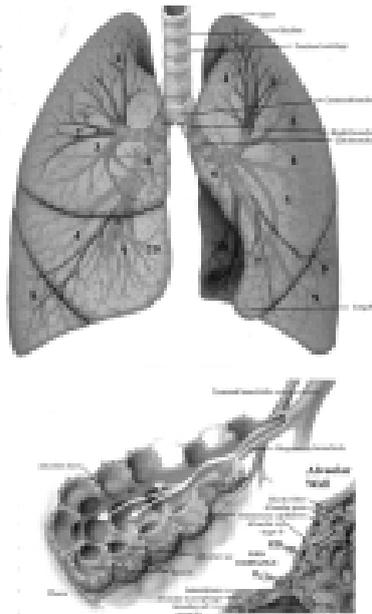


図1: 肺と肺胞の構造



中田 光 / なかた・こう

1954年、東京生まれ。東京大学農学部、京都大学医学部卒業。東芝中央病院内科勤務、米国ニューヨーク大学ベルビュー病院留学などを経て、現在、東京大学医学研究所微生物株保存施設助手。

クロファージに何か言ひようのない親しみを感じた。そのうちに、サルコイドーシスや肺線維症では小型で濃く染まるマクロファージが多く、過敏性肺臓炎では大きくて時に多核の細胞が増えることに気付いた。なんとかこの肺胞マクロファージを肺疾患の診断に応用できないだろうか？後藤先生や渡辺君に相談し、その頃マクロファージの研究で有名だった国立予防衛生研究所(=予研、現在の感染研)の細胞免疫部の部長であった徳永徹先生へ幼稚な研究計画を書いて送った。

数か月経ち、自分でも忘れていた頃、突然徳永先生からT病院へお電話をいただいた。自分の部にいる赤川という人が君に会いたがっているから明日予研に来なさいと言ふ。渡辺君に連絡すると、それじゃほくも同席して相手の様子を伺うからと喜んでくれた。大学の教養時代からの腐れ縁の彼は、何かにつけて私の保護者たらんとしていたのだ。

次の日、訪ねると、徳永先生と室長の赤川先生はケーキと紅茶を用意してくれていて、先に着いた渡辺君と歓談していた。赤川清子先生(写真2)はそれまでマウスの腹腔マクロファージや肺胞マクロファージを精力的に研究されていて、論文を沢山出しておられた。「診断のために肺胞マクロファージを活用するという研究も重要ですけど、私のもっと面白いアイデアを持っています。マウスで発見したことをヒトの肺胞マクロファージで確かめてみたい」と仰られ、ご自分のアイデアと研究の面白さを得々と話された。免疫学の素養もマクロファージに関する知識もほとんどゼロに近かった私は、赤川先生の話していることをまるで異星人の言葉のように聞いていた。しかし、ひとつだけ、この先生はこれまで出会った研究者とは違うと思った。農学部の卒業研究や医学部の教養時代にも研究室に入りしていたが、そこで出会った研究者はみなしかめっ面をして暗かった。研究は苦しく辛いものというイメージが私の中に完全に出た上がっていたのだ。その反対に赤川先生は研究が楽

しくて仕方がないといった雰囲気漂わせていた。

肺胞マクロファージは何処から来たか？—MPS学説と局所増殖説

こうして次の週から、T病院で診断のために採った肺胞洗浄液の残りを大事に釣用のクーラーボックスに収めて予研へと通うこととなった。病院の先生方は、私が釣に凝っていて毎週夜釣りへ出掛けるものと思っていたらしい。最初は、患者の肺胞マクロファージを使って実験していたが、そのうちに、どうしても健康人から欲しくなった。T病院にはいろいろな大学から研修医がローテートしてくる。中に気管支鏡を習いたいという人がいたら、しめたものだ。「気管支鏡をやる医者は一度は自分が経験してみなければ駄目だ」と説得して被験者になってもらう。一度、母が咳が出て困るというので、この時も精密検査を受けるように勧めて採らせてもらった。それでも足りないので、同僚の医者に頼んで、私自身が被験者となった。通常は、150ccの生理食塩水で肺を洗うが、肺胞マクロファージを沢山欲しいので、250-300ccで洗った。そんなに洗うと咳が出て大変だろうと思われるかもしれないが、直径5mmの気管支鏡の先端が行き着く末梢の気管支にはほとんど痛みや咳を誘発する神経が通っていない。したがって、肺に生理食塩水を注入しても、胸に微かな冷たさを感じるだけで、快感すらあるのである。検査後、麻酔がまだ醒め切らないだるい体を引きず

って、自分の肺胞洗浄液を予研に持って行った。すばやく肺胞マクロファージを回収して液体培地に

浮遊させて、プラスチックプレートに撒いて、また大急ぎで帰宅すると、家内がアイスノン冷やして待っていた。夜半からがたがた体が震えて39度を越える熱が出るからである。しかし、この熱は翌朝には必ず退いて爽快な気分で出勤できるのだ。自分の肺胞マクロファージは誰に気兼ねがあるわけでもなく、この熱発さえ我慢すれば沢山とれるので、この研究が終わるまで計8回採ってもらった(写真3)。

さて、赤川先生は肺胞マクロファージの起源を研究していた。つまり、肺胞マクロファージが何処で増えて、どんな細胞から出てくるのかという問題である。肺胞マクロファージは絶えず痰と一緒に肺から失われているのに、肺においてその細胞数が減らないのは絶えず何処からか新しい細胞が供給されているからに違いない。このテーマは100年近く論争されていて、いまだ最終的に決着がつかないが、凡そ2つの説がある。ひとつはMPS学説といって、骨髄にマクロファージの素になる幹細胞があって、だんだんと成熟して血液中の白血球の一種である単球になり、それが全身の各臓器に移動してその臓器に特有なマクロファージに分化するという説である。もうひとつは胎児のころにやはり白血球と共通な祖先の幹細胞に由来する幼若な細胞が肺にやってきてそこに棲みつき、在住



写真2：赤川清子先生(左から2人め)



写真3：気管支鏡検査を受けている私

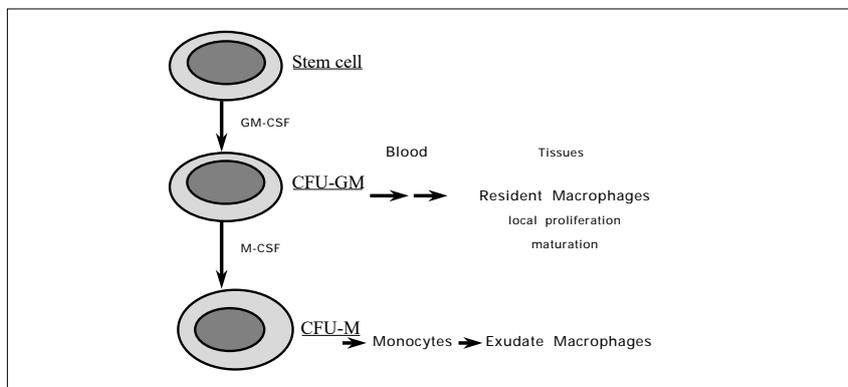


図2：マクロファージの分化に関する二つの考え方胎生期にマクロファージの前駆細胞が組織に定着し、在住マクロファージとなって組織で増殖分化するという考え方と血中単球(Monocyte)が組織へ移動しマクロファージへ分化するという考え方がある

マクロファージとなって必要に応じて分裂し、新しい細胞が供給されるという局所増殖説である(図2)。

赤川先生はその頃後者の説を支持するデータを出していた。マウスの肺胞マクロファージに顆粒球マクロファージコロニー増殖因子(GM-CSF)を加えて培養すると同じ形の細胞がどんどん増殖して細胞の集落をつくる。もう一つの増殖因子、マクロファージコロニー増殖因子(M-CSF)を加えると、やはり増殖するけれども、もとの肺胞マクロファージとは似ても似つかない長細いマクロファージになる。マウスの肺からはGM-CSFが放出されることがわかっていたので、赤川先生はこの増殖因子によってマウス

の肺胞マクロファージは肺胞内でどんどん増殖するのだらうと唱えたのである(写真4)。

赤川先生と私はヒトの肺胞マクロファージを使って同じような実験を始めた。ところが、ヒトの肺胞マクロファージはマウスのとは異なり細胞内器官が発達した大きな細胞で、表面抗原(細胞表面の蛋白質)の種類も違っていた(写真5)。培養してGM-CSFを加えると増えるけれどもマウスのように集落をつくるまでには到らない。また、M-CSFではほとんど増えないし、形も変わらないことがわかった。しかし、ヒトの肺胞マクロファージは培養すると何ヵ月間も生き続けるから、マウスの肺胞マクロファージのように盛んに分裂しなくても肺の中で数を維持でき

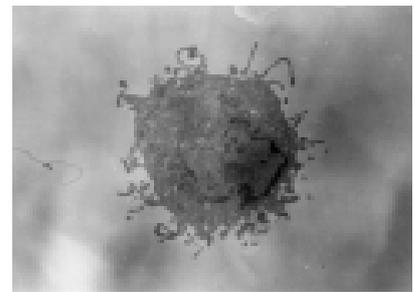


写真5:ヒトの肺胞マクロファージの電顕像  
(新潟大学医学部第二病理 内藤真先生のご提供による)

るに違いない。私達はそう考えて結果を論文にまとめた。幸い、マウスの研究もヒトの研究も『Journal of Immunology』に別々に掲載された。

二元説に考えを改める

その後、私は平成元年に赤川先生の下を離れて結核研究所で独立して研究を進めることになり、もう一度肺胞マクロファージの起源について考えてみることにした。この頃駒込病院が骨髄移植した患者のサイトメガロウイルス肺炎の早期発見の目的で移植後の患者に肺胞洗浄をすることになり、後藤先生から、毎週のように洗浄液が送られてくるようになった。肺胞マクロファージの数や増殖力や染色体を注意深く観察すると、移植後50日ぐらいを境にして急速に移植した骨髄由来の(ドナーの)肺胞マクロファージが増える。しかもドナー由来の細胞は肺胞で盛んに増殖していた(写真6)。もし、肺胞マクロファージが肺での自己増殖だけでその数を維持しているとしたら、ドナー由来の肺胞マクロファージが増えるのはおかしい。骨髄からマクロファージの素となる細胞が肺にやってきてそれが肺で増えるというふうにと考えるとこの現象は矛盾なく説明できるのではないかと考えて、私は考えを修正することにした。一方、赤川先生はヒトの血液中の単球をGM-CSFを加えて培養すると、肺胞マクロファージそっくりの成熟したマクロファージに分化することを見つけて、肺胞マクロファージの起源は単球の肺への流入

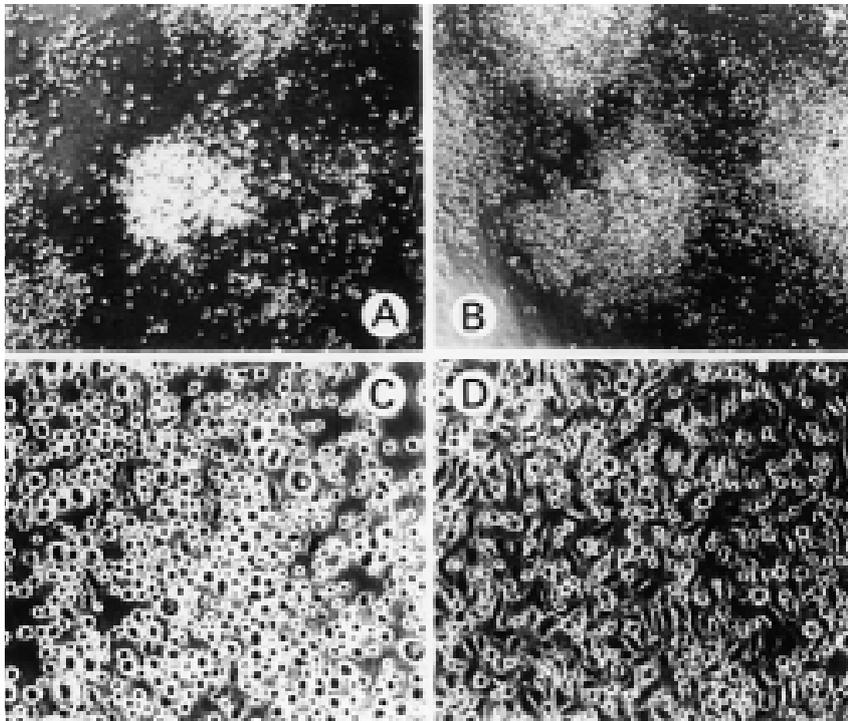


写真4:プレート上で増殖したマウス肺胞マクロファージ

- A: GM-CSFを加えて増殖したコロニー
- C: 同上 強拡大、円形の細胞が多い
- B: M-CSFを加えて増殖したコロニー
- D: 同上 強拡大、紡錘形の細胞が目立つ

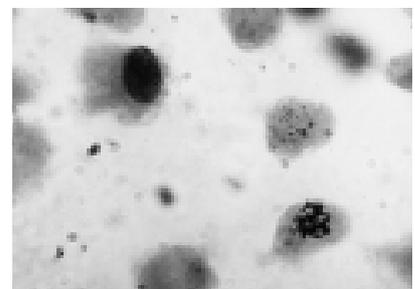


写真6:肺胞洗浄液中の増殖期にある肺胞マクロファージ、核が黒く染まっているのが増殖している細胞である右下に糸状期にある染色体が染まっている

と肺での自己増殖の2つからなるという二元説をとるようになられた。

また、赤川先生と私は肺胞マクロファージの起源について肺が産生するGM-CSFが不可欠とずっと考えてきたが、93年に発表された雑誌『サイエンス』の論文によってその確信も揺らいでしまった。GM-CSFのノックアウトマウス(GM-CSFの遺伝子に変異を加えてその作用をなくしてしまったマウス)を造ると、予想に反してこのマウスの肺胞マクロファージは全く減らなかったのである。GM-CSFとほぼ同じ働きをするIL3の遺伝子も同時にノックアウトしてダブルノックアウトマウスにしても結果は同じだった。ただ、このマウスは肺胞蛋白症という肺胞に蛋白が蓄まる奇病に罹って死ぬ。ヒトとマウスの肺で作られているGM-CSFはマクロファージの増殖に不可欠なのではなくて、肺にとって重要な何か他の役割があるらしい。その何かを明らかにするために2年前から私はヒトの肺胞蛋白症の研究を続けている。

早いもので最初に赤川先生を予研に訪ねてから10年が過ぎた。赤川先生に出会わなかったら、今頃どこかの病院で呼吸器内科医として働いていただろう。私が予研を去った後も盛んにいろいろな人が先生の下で指導を受けに集まってきている。傍から見ても決して恵まれた研究環境とは言えないけれども、それでも集まるのは、人徳だろう。研究の進め方や実験を指導出来る人は多いが、研究の面白さを伝え、夢を与えられる指導者は少ない。赤川先生はそんな人である。そして、その基になっているのは、天性の洞察力と弛まぬ勉強である。先生は週に1度は朝から晩まで図書館に籠もって論文を読みあさっているらしい。アイデアはどうもその時に出てくるのだろう。そのアイデアを聴くのが楽しくてまた人が集まってくる。

私が研究を始めたのは以上のような経緯だったが、周囲が助めてくれて平成元年にヒト肺胞マクロファージの仕事で学位を取った。学位審査の主査は、今の上司である金が崎士朗先生で、発表後にこんな感想を述べられた。「中田君が最初の仕事を赤川先生の指導の下でやったのは

成功だったと思う。でも、これからは赤川先生と離れて赤川流から脱却していかなければだめだ。」私は赤川流の信奉者だったので、何を仰っているのだらうと気に止めなかった。しかし、研究を続けるにつれて、この言葉の意味が少しずつわかっていった。マクロファージを分離し、プレートに撒き、サイトカインを入れて分化や増殖をみるという実験を繰り返す限り、赤川先生を永遠に越すことができないことを悟ったからだ。いろいろと文献を集めて読みあさり、これはいいアイデアだと思って赤川先生に話すとそれはもうすでに先生が試していたり、誰かが発表したことだったりした。そんなわけで、私は意識的に赤川先生が入ってこられないような臨床検体を用いた研究へ傾いていった。そうしながらも、絶えず赤川先生が何を考え、何を研究しようとしているのか気になって仕方がなかった。迷走する私を後目に赤川先生はマクロファージの分化の研究を一直線に進められていった。

留学や臨床から基礎への転向をへて、私は最近漸く赤川先生の仕事が気にならなくなり、自分流の研究に落ち着くようになった。それでも自分の生き方と研究はこれでよいのだろうかとか時々不安に襲われる。研究は私に夢を与えてくれるが、同時に研究は過酷で孤独だ。光が射したと思うのはほんの一瞬で、すぐにまた深い闇がやってくる。私はその闇の深さに怯え、自分の無力さ無能さに叩きのめされる。そんな時に赤川先生に会って話をすると、先生の明るさに勇気づけられて再び研究を続けていけそうな気になるのである。



写真展

奈良原一高 Ikko Narahara

「消滅した時間 1970-1974」

Where Time Has Vanished 1970 -1974

3. 24 Tue.- 4. 24 Fri., 1998

日本の現代写真の流れの中でエポックを築いてきた奈良原一高氏は、数多くの作品を発表しています。なかでも1975年の写真集「消滅した時間」は、様々な対象との出会いの中で、作者に内在する「時間」の意識を明らかにするものでした。光を媒体として現実を捉える「写真」は作者にとって、過去・現在・未来へと多様な拡がり内包する表現にはかならないのです。本展では、20年ぶりに再編集され出版された写真集「消滅した時間」より、代表作30余点を展示いたします。

フォト・ギャラリー・インターナショナル

東京都港区虎ノ門2-5-18 〒105-0001 月・火・水・木・金 11:00-19:00  
Tel 03 350 1 9123 土・日・祝日 休館

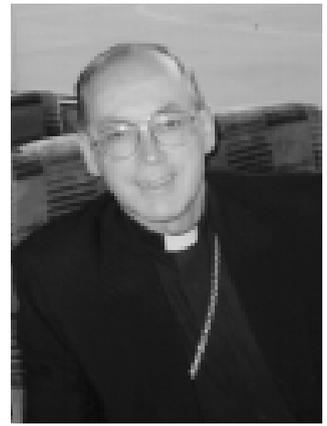


\*表紙の写真は伊藤義彦作品「MM93014, 1993」です。(いとう よしひこ)

1951年生まれ。ハーフサイズのカメラを使った撮影で、ネガのひとコマを引き伸ばしてプリントするという通常の方法を取らずに、撮影順にネガの全部のコマを並べてコンタクトプリント(密着焼き)し、ひとつの画面で独特の作品を創り出しています。

主な個展:「観ること・観続けること」(1994年P.G.I.) 東京都写真美術館や原美術館、北海道立美術館、板橋区立美術館などでグループ展多数開催。

# ペルー日本大使公邸占拠事件 人質解放から一年を迎えて



シブリアーニ大司教

佐多 保彦 株式会社東機貿 代表取締役社長

1997年10月4日12:15pmロサンゼルス発成田行きユナイテッド航空875便機内にて、初めての日本訪問途上にあったペルーのシブリアーニ大司教に偶然お目にかかり、しばらく隣の席でお話させていただく機会があった。シブリアーニ大司教といえば、1996年暮れから4カ月間世界中を震撼とさせたあのペルー日本大使公邸人質事件で、保証人委員会のメンバーの一人としてテロリストとの仲介役を務められたことが、まだ私たちの記憶に新しい。

日本到着後、大司教のご好意で、10月15日に兵庫県芦屋のセイドー文化センターで行われた早朝ミサと朝食に招待されるという幸運を得た。

実は私は芦屋生まれで、ミサの前日の10月14日は満50歳となる自分にとって記念すべき日であった。もともと私の関西出張に合わせ、生を受けた芦屋の渡辺産婦人科医院をお礼と近況報告を兼ね訪問する予定であったため、このお招きを喜んで受けた次第である。

そのセイドー文化センターが渡辺医院から徒歩10分足らずのところにあることにも驚いたが、そのミサの中でシブリアーニ大司教が「昨日は佐多さんの50歳の誕生日でした」と祝福のお言葉を下さったのには驚くとともに感激した。なぜなら私の誕生日が10月14日であることを申し上げたのは10日以上前の飛行機の中、しかも初対面の人間のこと、メモを取られた様子もなかったからである。

若い頃、バスケットボールのナショナルチームの一員であられたというシブリアーニ大司教。そんなご経歴も、高位聖職者でありながら人々に親しみやすさを感じさせる一因かもしれない。また、大司教の英語がたいへん美しく見事なものであったことを付記しておきたい。

大司教のこの訪日は日本の各新聞で報道されたが、日本で発行されているスペイン語新聞 International Press (1997年10月18日付)でも大きく扱われた。興味本位からその記事を翻訳してみたところ、大司教のあたたかく誠実なお人柄が偲ばれ、また我々が知らされていなかった事実も記載されていた。

人質解放からちょうど一周年にあたる今、再び感謝の意を込めて、この記事をごここに紹介させていただくこととした。



International Press (1997年10月18日付)

## シブリアーニ大司教、橋本龍太郎首相にカトリック入信の勧め

アヤクチャョ県(\*1)への援助も求める

アヤクチャョのフワン・ルイス・シブリアーニ大司教 (Monseñor JUAN LUIS CIPRIANI) は1997年10月6日永田町の首相官邸を訪れた際、橋本龍太郎首相にカトリックへの入信を勧めた、と共同通信は伝えている。

この日カトリックへの入信を勧められた橋本首相は、妻と子供たちがカトリック信者であると以前語ったことがある。そこでシブリアーニ大司教は、この機会を利用して首相にカトリックへの改宗を提案したのだった。大司教はまた、橋本首相が愛煙家であることを知り、キリスト教信仰では喫煙は禁止されていないことをつけ加えた。

日本政府は、リマで起こった日本大使公邸人質事件で犯人と政府間の調停役を努めたシブリアーニ大司教に対し正式に謝意を表明し、続いて記者会見を行った。その席で大司教は、アヤクチャョ県の貧困対策プロジェクトを実現するには是非とも日本国民の助けが必要であると述べた。アヤクチャョは、ペルーでも最貧困地域の一つで、また、センデロ・ルミノソ(\*2) 破壊運動の出発点になった場所でもある。

大司教は、国交においては、政府間の関係だけではなく、国民と国民との関係がより重要であると主張した。これは、社会が本当に必要としているものより、政治的駆け引きの方が重要であるかのような今の風潮を暗にたしなめたかのように思える。



シブリアーニ大司教と筆者(左)、セイドー文化センターにて

「アヤクチョの住民は、日本の国民の方々の援助と協力を必要としています。私たちは今この地域の衛生、食料、職業、教育などの問題を少しでも解決しようと各種プロジェクトを推進していますが、そのために是非とも日本人たちの助けが必要なのです」この援助は、日本での窓口となっている民間援助団体「地球ボランティア協会」★を通じて行うことができるという。

シブリアーニ大司教はこの席でMRTA人質事件についても語った。人質の解放に武力を行使するという政府の決定に怒りを感じたか、という記者団の質問に対し、「事件の複雑さを理解するには、事件はペルーの日本大使館が起こしたもので、またペルー政府が起こしたものでなく、武力と暴力行為によって政府の政策の改善を試みる一グループによってひき起こされたという事実」に焦点をあてるべきであると述べた。

「暴力が通用する場所はこの地球上のどこにも存在しません。暴力からは何も生まれないのです。私は平和と呼ばれる奇跡のために全力を尽くしました。私はMRTAに、暴力によって彼らの目的を達成することはできないことを理解させようと努めました」大司教は、政府の武力介入によって命を落としたすべての人々に、心から追悼の意を捧げたいと繰り返した。「彼らはすべて私の兄弟でした。私たちは家族だったのです」

シブリアーニ大司教は、このような事件が再び起こることがあれば、また調停役を引き受けるだろうと述べた。なぜなら、同胞のために自分の命を捧げることほど美しく価値のあることはない、それはちょうどイエス・キリストが我々の罪を背負って十字架にかけられたのと同じような行為だからだと言う。

大司教はまた、自分が所属するカトリックの組織オプス・デイ(\*3)のことに触れ、オプス・デイは、彼の行動や彼の下した決定とはまったく関係がないことを強調した。「オプス・デイのメンバーはすべて自分自身の行動に責任をもっています。カトリックの一組織として、オプス・デイはそのメンバーの一人一人の行動に責任をもつものではありません」と述べた。

さらにこのアヤクチョの大司教は、自分が保証人委員会に加わったのは、フジモリ大統領の

要請でも橋本首相の要請でもなかったと述べ、「教会は、この事件において、人々の命や尊厳を守ることが求められたのです」と結んだ。

\*1 Ayacucho ペルー中南部に位置する人口約50万の県。シブリアーニ大司教の教区。ペルーの中でもテロ活動の犠牲者が多いことで知られる。

\*2 Sendero Luminoso 「輝く道」の意味。毛沢東主義の極左ゲリラ。ペルーでは1980年代後半から90年代にかけて、テログループによる破壊活動が猛威をふるった。Sendero・ルミノソはトゥバク・アマル革命運動(MRTA)と並ぶ二大テロ組織としてその中心的存在。

\*3 Opus Dei ラテン語で「神の働き、わざ」を意味するオプス・デイは、1928年マドリッドで誕生し、現在世界中で約8万人のカトリック信者が所属している。オプス・デイは、カトリック教会用語で属人区と呼ばれる組織。カトリックには修道会、教区などのグループ分けが存在するが、属人区はそれらとは異なったグループ分けで、比較的新しい形態である。あらゆる条件の人々に、世間にながら信仰に完全に一致した生活することを勧め、社会のあらゆる分野の福音化を目指している。

日本におけるオプス・デイ連絡先  
小寺左千夫  
〒659-0093兵庫県芦屋市船戸町12-6セイドー文化センター  
Tel: 0797-22-9650

★地球ボランティア協会

世界の恵まれない人々の生活向上と環境保護を目的に1992年に設立されたNGO(民間援助団体)。途上国においては、現地のNGOと連携し、教育、職業訓練、保健医療、施設建設、環境保全などの分野で協力活動を行っている。日本国内では、セミナーやキャンペーンを通じての啓発、

普及活動を行い、途上国体験プログラムも実施している。ペルーに対しては、シブリアーニ大司教の貧困対策プロジェクトを支援するため日本側窓口を務める。

シブリアーニ大司教は、「私の教区だけでも、テロリズムで親を失った子供たちが400人以上います。貧困は人質事件のような暴力の温床になります。小さな善意がそれを防ぐことができるということを、日本の皆さんに知っていただければと思います」というメッセージを残している。

会長 稲畑汀子  
〒659-0093 兵庫県芦屋市船戸町12-6  
Tel: 0797-34-0078 Fax: 0797-34-1061

シブリアーニ大司教・ペルー貧困対策プロジェクト支援金送付先  
郵便振替口座 01190-8-57380  
加入者名: 地球ボランティア協会

日本大使公邸人質事件

1996年12月17日、ペルーの首都リマで、左翼ゲリラMRTA(トゥバク・アマル革命運動)によって日本大使公邸が占拠されるという事件が起こった。ペルー政府高官、青木日本大使、日本大使館員、日本企業駐在員ら72名が最後まで人質として残されたこの立てこもり事件は、発生から127日を経た97年4月22日政府軍特殊部隊の突入作戦により武力解決を得たが、14名のゲリラの他に、ペルー人判事1名、軍人2名の命が奪われた。

ペルー政府は長期化の様相をおびてきた事件を危惧し、年明け早々、事件解決の条件を話し合うための「保証人委員会」を設置。シブリアーニ大司教、カナダ大使、赤十字代表らがメンバーとして選ばれ、その後9回にわたってゲリラ側と予備的対話が行われた。フジモリ大統領がキューバを訪問して事件解決後のゲリラ受け入れの合意を取り付けた一方で、保証人委員会は独自にゲリラ側と話し合いを続けたが、事件は政府による突然の突入作戦で幕を閉じた。

# 出会い (5)

奥村 一郎



奥村 一郎 / おくむら・いちろう

1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。著書は、『断想』『主とともに』『祈り』（女子パウロ会）、『わたしの心よ、どこに』（サンパウロ）、『聖書深読法の生いたち』（オリエンズ宗教研究所）など多数。

その時、なにがあったのか？

なにもなかったといえば、嘘になる。

なにかがあったといえば、．．．？

## 1. 猪突猛進

生まれ年が猪であったせいか、戦中の特攻隊のごとく、わたしは、聖書とカトリック教会に真っ正面から頭をぶっつけていった。というのも、前に述べたように、聖書はキリストを神話化し、カトリック教会はそのキリストをさらに偶像化して、この二千年間、宣教や殉教の美名のもとに人類を欺いてきた元凶である、というのが、その頃の私の持論であった。そこで、長年の間にそのカトリック教会によってでっちあげられてきたキリストの仮面を剥ぎ落とさねばならないという使命感に私は燃え上がった。それからというもの、聖書にみるキリストの虚像を否定する理論を固めるため、まるで気が狂ったかのように猛勉強を始めた。洋の東西を問わず聖書学や神学書を読み漁った。古いもので有名なものでは、大逆事件(明治43年)の張本人として処刑された幸徳秋水(1871-1911)

「基督抹殺論」(1911年刊)を夏休みに滞在していた寺で読み耽ったのもその頃。また、十九世紀のカトリック教会をゆずぶったフランスのE. Renan(ルナン、1823-1892)「イエス伝」(1863年刊)の「比類なき人間キリスト」などに共鳴、また、独断的権威主義のために内部分裂をくりかえしてきた教会の悲惨な歴史を他山の石として、日本的キリスト教を掲げた内村鑑三(1861-1930)の「無教会キリスト教」の理想にも学ぶものがあつた。また、そこには、数多くの優れた知性人がいたなかで、とくに当時の東大総長南原繁や、その後任の矢内原忠雄総長らの直接また間接の影響も少なからず受けた。それに少しばかり身につけていた英語と独語の知識を駆使して、ナーベルフェルト師の書棚や、東大のロックフェラー図書館などから、役立ちそうな論文や書物を狩り集めてきてはメモを丹念にまとめ、自分なりに納得のいく反カトリック的キリスト論の理論構成をめざしてガムシャラに突進した。

## 2. 法学部卒業試験

ところで、独学一筋、指導者も協力者もなく孤立無援、泥沼に

引き摺り込まれるような悪戦苦闘のうちに、アッという間に二年がすぎ、いつのまにか、法学部卒業期日が間近に迫ってきていた。というのも、生涯の課題として必死になって取り組もうとしたキリストとの格闘になんの関わりもない法学部の講義には全く興味がなく、旧制一校の頃から恩師でもあり、その時、東大文学部長であった桂寿一教授に願って、専ら哲学、比較宗教学など、文学部での様々な講義を夢中に聴講し回っていたため、法学部の卒業試験のことに気がついたとき、迂闊にも手元に本も講義ノートもない。ハタ！と困ってしまった。怠けてしまった復学後二年分の試験科目を一挙にパスしなければ留学か退学！そんな事になれば、いつも貧しい中から学費の仕送りをしてくれていた両親に顔も立たない。

a. そんな困惑の最中、「苦しい時の神頼み」、助け船が見つかった。というのも、「同病相哀れむ」、とやら、同じような窮地に陥って困っていた私のようなオサボリ学生のなかに旧制一校時代からの幾人かの仲間がいた。その連中が一緒になって共同戦線を張ろうということになった。ひとりが一科目、事前に要点をまとめる。試験前夜に一所に皆集まって三十分ほどその話をきく。翌日、皆そろって試験場に行くという形。一回勉強するだけで十回の試験をパス。この方法は、幾つかの小課題に大いにパワーを発揮してくれた。しかし、私にはこれでも間に合わなかった。全受験科目を一挙にパスしなければならなかったからである。自分一人でやらなければならない幾つかの大きな課題が残っていた。そこで、別の助け船をひとりで工夫しなければならなくなった。

b. 楢円理論：また思案の挙げ句、一つの小さな考えが、ふと浮かんできた。格好良く「楢円理論」と名づけた。大したものではないのだが、とにかく、マスターキーのように、どの試験の扉も開けることのできる鍵のようなひとつのアイデアが欲しかった。今様

にえば、地球上どこにでもとどいて標的を粉碎する巡航ミサイルに比べてもよい。今ここで、その名(迷)案を解説する余裕はないが、いくつかの難関突破の新兵器になってくれた。とくに、威力を発揮してくれたのは、尾高教授の法哲学。最も難解な講義で、その試験も難しいといわれていた課目。わたしは、最後の二回の講義に出席しただけであった。ここで、初めて謎の新兵器、楢円理論を使用、数枚の長い答案を書いた。全くの自己流のものでしかなかったが、驚いたことに「優」という最高点をもらい、大学の噂にまでなったくらい。そのあと、経済学概論やその他の試験にも応用し、どれも、まずまずの成果をあげて、我ながら、ちょっといい気持ちになっていた。「何でも来い!!」と。

c.ところで、すこし傲慢になっていたところで、思わぬ伏兵がいた。殆どすべての試験を通過して、最後に商法の試験が残っていた。悪いことに、わたしは、この授業に一回も出たことがなかった。著名な大内兵衛教授の試験だけに、大教室が学生で一杯だった。教授は黒板に二つの問題を大書した。

- (1) 昨年、わたしは何を話したか？
- (2) 来年、わたしは何を話すだろうか？

その他、今思い出せない小さな質問が二つ程あった。ショックを受けたのは、言うまでもなく、わたし達サボリ仲間。完全にノックアウト！授業に出ていた大半の学生にはご褒美のように有り難い、まことに易しい問題。私はヤラレタと思った。流石の名物教授。当時の学生を戒めるのに見事な質問。オサボリ組は、悔しそうに、「ダメダ！」と呟きながら次々と試験場を出ていってしまった。わたしの新兵器ミサイル、「楢円理論」も間に合わない。しかし、わたしは、その時、ここぞとばかり腹を決めた。と言うのも、ここをパスしないなら、いままでの努力は全く水泡に帰してしまうからである。じっと右手に鉛筆をにぎったまま数分。突如、思いついた。

- (1) 昨年、わたしは何を話したか？
- 答 過ぎ去ったことに興味はない。

- (2) 来年、わたしは何を話すだろうか？
- 答 あなたが知っていれば足りる。

次に、私は書き始めた。「このような愚問を出すべきではない。出すべき質問は“来年、わたしは何を話すべきか？”と問うべきである。それについて私は書く。」と前置きして、得意の「楢円理論」をふりかざし、時間の許す限り何枚も力一杯書いて答案を提出した。採点は「優」、しかも、大内教授はたいへん感心されたようで、まるでオリンピックの金メダルをもらったように嬉しかった。この「楢円理論」最後の功績によって、昭和22年(1947)9月30日、無事、東大法学部政治学科卒業。内容の全くない奇異な卒業証書を手にして故郷の父母のもとに暫く帰った。しかし、後は、世の常とする就職と結婚というように、事は簡単に運ばなかった。むしろ、予想もしなかった本格的な嵐の前の静けさのようなひと時であった。(つづく)



東大在学時代(昭和23年)両親と

# ワインの収穫祭 “ラ・ポーレ”

横山 弘和

1997年11月、恒例のブルゴーニュ東京事務所主催「ブルゴーニュ栄光の3日間」ツアーが実施され、我々は再びブルゴーニュを訪れました。おおよその日程は前年と同じでしたが、今回は一つ違った行事が組み込まれました。それが「ラ・ポーレ・ド・ムルソー」と呼ばれるワイン生産者の屋食会に参加することでした。

毎年11月の第3土曜日から3日間開催される栄光の3日間は、大いなる賑わいを見せ、この月曜日のラ・ポーレで幕を下ろします。ラ・ポーレは、古くからフランス各地の農村で行われている、農産物の収穫を祝うお祭りの食事をさします。ブルゴーニュ地方のポーレは、白ワインの産地として知られるムルソーの村で行われ、有力な大手ワイン業者であるパトリアルシュ社が所有するシャトー・ド・ムルソーがその会場となります。この日は大勢のワイン農家の人たちが三々五々、ある人は両手に持てるだけのワインボトルをぶら下げて、またある人はワインのケースを肩にかついで集まってきました。ワイン生産者がそれぞれ自分が作った自慢のワインを、同業者と勧め合いながら昼食をとるためです。またこれは、毎年ぶどうの収穫を終え、ぶどう園の主人と畑で作業する人たちが共にテーブルを囲み、賑やかに食事を楽しむ機会でもあります。このポーレ・ド・ムルソーは、1932年に組織化され、昨年で65回を迎えました。最初はわずか35人で始まりましたが、次の年には90人、現在では400人も参加者で賑わいます。この日栓が抜かれて飲まれるワインは大変な量で、その重みでテーブルが傾くほどです。実は我々のツアーでは一度この会に参加したいと思いついた入場券の手配を試みましたが、原則的にワイン業者の紹介がないと難しく、また1年前には予約がいっぱいになってしまうということもあり殆ど諦めていました。ところが出発寸前に、なんと4席予約を取ることができたのです。当日は希望者を募り、ツアーと別行動でムルソーに向かいました。

さて、会場に到着して先ず感じたのは、土曜日の夜のクロ・ド・ヴージュでの会との違いでした。人々は極めてインフォーマルな身なりで、気取ったところはまったく見られません。ただ、初めて参加する我々が戸惑ったのは、受付がどこにあるのか、誰に聞けば自分の席が見つかるの

か、まったくわからない状態だったことです。大勢のワイン業者とそのゲストが、慣れた様子で食前酒を飲みながら楽しそうに会話を交わしているホールの中を、チケットを握りしめ人をかき分け席を探し回りました。そんな中、やっと一人の親切なマダムが席を見つけてくれたのでほっとしました。またその席がステージに近い良い席でしたので、思わず慌て過ぎたことが滑稽に思え、笑いがこみ上げてきました。我々の席の両側には、人のよさそうな、紛れもなくワイン生産者らしい家族が陣取り、さっそくテーブルの下から持ってきたワインを取り出し栓を抜いて勧めてくれます。ステージでは、食事に先立って主催者の挨拶、そして、続いて、この会での重要な行事である文筆家の表彰式が行われます。この会では、毎年一人、優れた著述で知られる文筆家が表彰され(\*)、その人物には褒美としてムルソーのワインが100本贈られます。ステージでは、コーラス・グループによる楽しいワイン賛歌、パン・ブルギニョンの手拍子などが続き、それを合図にいっせいにワインの注ぎ合いが始まります。ワインボトルは、左右、前からと次々に手回して回ってきます。そして後ろからも、食事はそっこのけでただ自慢のワインをひたすら注ぎ回っている人たちがいます。味わったワインの名前やヴィンテージを記録しようとしてノートを用意しましたが、グラスは2つしか与えられていないので、飲み干さないとワインの瓶が、前に次々と溜まってしまいます。隣から催促されるので、もう間に合わないかと記録を取るのには諦めました。

ワインの種類は若いワインや古いワイン、特級や並級のワインが無差別に供されます。しかし、白ワインはやはりムルソー、ピュリニエ・モンラッシェやシャサーニュ・モンラッシェが多く、その間に、時々ドイツ・ワインやカリフォルニア・ワインまでが回ってきます。これは後で思い返してみたのですが、味わったワインは少なくとも50種類を超えていたと思います。いやはや、世界の何処でこんな体験ができるでしょうか、と感激しました。

それでは料理についてはどうだったでしょうか。皿数はクロ・ド・ヴージュと同じく前菜からデザートまで6つのコースですが、違うのはサーヴィス法と料理の内容です。クロ・ド・ヴージュ



横山 弘和 / よこやま・ひろかず

1930年兵庫県生まれ。65年ホテル・オークラ(東京)入社。95年に退社するまでソムリエとして30年間一貫してワイン関係業務に従事する。88年11月ブルゴーニュ・シュバリエ・デュ・タートヴァン(利き酒騎士)叙任。現在佐多商會ヴィタリテ事業部在籍。

では、お皿が先にまかれ、シルバーのプラターから一人一人に料理が盛りられる、いわばクラシックな方法です。ラ・ポーレでは皿盛りでサーヴィスされます。何分お客はおとなしくテーブルに座ってなくて、立ち上がり右往左往するの



## 当日のメニュー

アカディア産オマールのレムラードソースあえ

新鮮なセロリと青リンゴ入り

蒸し煮したイシピラメのパヴェ オニオンのコンフィ

髓骨、オックステールのコンポート添え

仔牛のフィレミニョン

アミガサダケ添え

仔鹿のノワゼット

ムスリースフレで包んだポテトとヤマドリタケのガレット添え

チーズの盛り合わせ

クルミ入りパン

チョコレートパフェ

ブラックコーヒー

でぶつかる恐れもあり大変です。

メニューの構成は、前菜、魚料理、仔牛料理、そしてさらに鹿の背肉料理が出るのが珍しく、主菜が2つあるといった感じでした。郷土料理風のクロ・ド・ヴージュに比べ、よりヌーヴェルで味わいよく、盛り付けも繊細です。特に仔牛のモリーユ(あみがさだけ)添えは絶品で、仔牛をこんなに美味しく食べたのは生まれて初めてです。

さて、料理の進行としては、最初のオードヴ

ルが1時頃にサービスされます。我々は、何分昼食会ですから、いくら長くかかっても食事は3時頃には終わるだろうと思っていたところ、それは大間違いでした。サービスは非常にゆっくりで、皿と皿の間隔が長く、3時の時点ではまだ魚の料理が終わったばかり。それから肉料理が2種類、チーズ、デザート、やっとコーヒーが出たのは5時過ぎでした。さすがに、酔っぱらって片隅で寝込んでいる人や、肩を抱かれて帰って行く人たちも見かけられます。ポーレの語源はひとつの銅を分かち合うことと伝えられていますが、まさに文字通りです。ブルゴーニュで、それもムルソーで、年に一度しか味わえない記憶に残る素晴らしい体験をもつことができました。

#### 1997年ブルゴーニュ・ワインの作柄

さて、気になるのは昨年のワインの作柄の良し悪しです。幸い1997年はブルゴーニュ全体、北はシャブリから南はマコン、ボジョレーまで良い天候に恵まれました。それは、太陽、太陽、そして更に太陽、夢の収穫という表現で報道されています。暑く乾いた天気が8月から10月の初めまで続いたことは、北に位置するブルゴーニュでは珍しいことです。あるワイン生産者はこう言っています。「このように黄金に輝いたシャルドネを見たことがない。それらはまるでひとつひとつが小さな太陽のようだ」

畑での腐敗は極めて少なく取り入れはゆっくりと行われ、補糖はほんの少しか、またはまったく必要としませんでした。量的には、1995年よりやや多く、1996年と比べると3分の2ほどの収穫量です。更に興味深いのは95年、96年そ



シャトー・ド・ムルソー

して97年と3年も優秀なヴィンテージが続いたことです。そんなことから昨年のオスピス・ド・ボレーヌの競売では、白ワインが38%、赤ワインが46%、前年に比べ値上がりしました。現在の世界的なワインブームの影響で、我が国に輸入される高級なブルゴーニュ・ワインも、おそらく更なる値上がりが見込まれます。ワインの作柄がよいからと、手放しで喜ぶわけにはいかないとことです。

\*1997年度ポーレ・ド・ムルソー賞受賞者はアラン・デュオー(Alain Duault)だった。デュオーはブルターニュ生まれの音楽評論家。放送界やマスコミを通じて「バックハ・バックス音楽祭」をアピールしてきたが、その都度、世界中に知られるムルソーワインの高い品質と音楽とを巧みに比較している。ピアノ教師、音楽誌編集、ラジオ局プロデューサーなどを経て、現在はフランス国营テレビ局FR3の人気番組「ミュージカル」で、プロデューサー兼司会者を務める。



自慢のワインを手に集まるワイン生産者たち



ラ・ポーレ・ド・ムルソー



Château de Chailly / シャトー・ドゥ・シャイイ

## ブルゴーニュへ、ようこそ

中世がいまだに息づいている  
ブルゴーニュへいらつしやいませんか。  
数々の銘酒を生み出すぶどう畑、  
ガルメレストランの数々、中世そのままの街なみ、  
美しく広がる大地や、小さな村々、  
豊かな生命力と「はだのぬくもりを感じる地方、  
それがブルゴーニュです。」



お問い合わせ  
(株)佐多商会ヴィタリテ事業部 担当: 岩沢  
Tel. 03 3582 5087